

～文化的歴史的所産を巡る～ 残したい情景

第48回 兵庫県尼崎市

一般財団法人 日本不動産研究所

尼崎市は、兵庫県の南東部に位置する都市であり、大阪府の自治体を除いては大阪府に隣接する唯一の自治体である。大正5年4月1日に、旧尼崎町と立花町のうち東難波・西難波の区域に市制が施行され、人口3万2013人の都市として誕生した。兵庫県下では神戸市、姫路市に次いで3番目、全国では66番目の市制としての誕生であった。

産業革命の象徴

日露戦争後から第一次世界大戦期にかけて、尼崎町や大庄村南部で会社や工場の設立が相次ぎ、工業都市としての基盤が徐々に形成されていった。特に、尼崎地域における産業革命の象徴となった尼崎紡績は、この時期に綿糸紡績

と織布の兼営を実現し、全国規模の大企業へと成長した。臨海部には旭硝子、横浜電線といった財閥系企業や、東亜セメント、日本リーバ・ブラザーズ等がいずれも明治40年代に進出する等、工業地帯化が進んだのであった。

更に、明治期後半から大正期にかけて、旧尼崎城下町周辺には、いくつもの工場が建設されていった。旧城郭の濠も埋められ、役場や学校用地、住宅地になるなど、近世以来のまちのたたずまいは、大きな変貌を遂げることに

工業都市として尼崎が本格的に形成されたのは明治末から昭和初期にかけてで、現在の尼崎市域の人口は年々増加し、住宅地や工業用地は従来の市街地からその周辺へと広がっていった。

繁栄を極めた工業都市

生活基盤の市場・商店街に陰り

また、田辺聖子氏の著書「歳月切符」の中で「阪神電車の踏切がひっきりなしに鳴って、そこから東へかけ蘭市あがりの商店街がクモの巣のよう

に四通八達している」と書いた。通りの両側には、呉服屋や蒲鉾店などといった老舗の商店や食堂などが軒を連ねた。年末の正門払いの大売り出しになると、市内だけではなく阪神間一円から人々が集まってきたとされる。

その他にも多くの市場・商店街が尼崎市に形成され、昭和43年時点の商業団体数は商店街38団体、小売市場50団体となり、尼崎市域で市民の生活基盤を形成していた。

しかし、時代が進むにつれて目立つシャッター街。しかし、時代が進むにつれて商業団体の数は減少し、現在約50団体となっている。なお、当該団体数は申請上の数値であり、実際に営業している団体数は、上記団体数以下の可能性があるとのことである。

いた「三和」は、現在の新三和商店街、三和本通り、三和

尼崎市に人情味溢れ、活気に満ちあふれた温かい商店街が1つでも多く残り、人々の憩いの場を次の世代まで残して欲しいと心より祈願する。
(神戸支所/不動産鑑定士・藤原康紀)



三和市場内部⑤ にぎわいを見せる当時の商店街④ (共に尼崎市立地域研究所資料館所蔵) 現在 尼崎中央商店街⑥

